

※評価 (A, B, C)

番号	評価項目	自己評価		学校関係者評価		今後の改善に向けて
		評価	評価についての説明	評価	評価についての説明	
1	主体的・対話的で深い学びを追求し、協働する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業改善に努めている。	A	昨年度より実施された新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業研究会を全学年で行い、授業改善に努めている。コロナ禍で机を適度に離したり、ペアやグループでの交流活動も制限したりしているものの、ICT機器を効果的に活用しながら読み解き理解する力の育成を推進している。	A	学校運営協議会や保護者対象の授業参観では、コロナ禍のため教室内は児童机の間隔が離れていたり、窓や扉が外されていたりするものの、授業風景は昨年度と変わりなく、児童も熱心に学習していると見受けられる。昨年度より新たな学習指導要領がスタートしているため、少人数を強みとした授業にすることで、児童の学力の向上を図ってほしい。	コロナ禍であるものの、感染予防策を講じながら、地域人材を生かした特色ある教育活動を行っていると考えられる。今後、本校は入学生数が減少する傾向があり、異学年で協働する授業に改善する必要がある。これらの取り組みと、新学習指導要領で求められる授業改善をバランス良く推進し、児童に対し、本県が推進する「読み解き力」を育んでいきたい。
2	道徳の授業改善や日々の指導、朝読書等を通して、生命を尊重する心や公共心、公德心等の心情を高めるとともに、道徳実践力の向上に努めている。	B	道徳が教科化され、本校では教科書を効果的に活用しながら授業を進めている。コロナ禍ではあるが、11月に道徳授業の参観日を設け、保護者に理解を求めている。また、道徳の時間を要としながら今年度も、全教職員で公共心や公德心の向上を目指す機会を実施してきた。今後も小規模校の強みを生かして、全校児童に目を配りながら、道徳心を培うよう努めている。	B	道徳では、級友と建前でなく本音で語り合うことが重要である。そのためには、何でも語り合える学級経営が重要である。しかし、道徳的な習慣の確立は、学校だけではなく、地域や家庭との連携が重要であるとの考えから地域・保護者と協力できることがあれば、引き続き要請してほしい。	黙って集中して清掃する「黙読（もくもく）掃除」を始めて3年が経過し、子どもにもすっかり定着した。今後も継続して行い、道徳実践力の向上に努めたい。また、小規模校であるがゆえ、子どもとの道徳的な言動を積極的に見つけ、教職員間で情報共有を密にしていこう。更に、道徳的価値観を高める支援や教材に関する研修も行い、さらに道徳科の授業改善に取り組みたい。
3	体育授業の工夫改善を図るとともに、日常的な遊びや行事の中で、子どもの体力向上に努めている。	B	3年前から始めた3分間持久走「ランラン・ランニング」は、運動の苦手な児童も無理なく参加でき、好評である。また、教員が鉄棒の指導に力を入れることで、休み時間も自主的に練習に励む児童が増えている。しかし、コロナ禍で休み時間を制限したせいか、放課後に日常的にボール運動をする児童は少なく、更なる体力向上への取り組みが必要である。	B	地域の公園でボール運動をしている児童を見ることはほとんどない。運動に苦手意識のある児童が多いので、継続して体力向上の指導に努めてほしい。鉄棒やランラン・ランニングのように、自分のペースで取り組める運動は、比較的子どもに合っていると思う。	体育の授業で、教員が熱心に鉄棒を指導することで、子どものやる気に火が付き、休み時間も自主的に練習に励む子どもが増えた。運動に苦手意識がある子どもたちも、教員のやる気による指導により、休み時間の過ごし方が変わった。指導方法と共に、子どもの自己肯定感を高める指導に努め、運動が好きな児童を増やしていきたい。
4	職員研修、OJT等に主体的に参加し、板書やノートの工夫、ICTの活用など、学力向上のための工夫改善を進めている。「働き方改革」を意識し、校務の効率化に取り組んでいる。	B	本校は若手教員が多いため、自主的に相互の授業参観を行うOJTを推進している。また、教員個々の授業力の更なる向上を目指し、毎月研究授業を行っている。さらにICTの活用能力を上げるために研修や実践を通じて、授業改善を目指し続けている。しかしながら翌日の教材研究を熱心にする教員が多いため、超過勤務が課題となっている。	B	学校運営協議会の授業参観では、どのクラスも「めあて」が掲示され、デジタル教科書も活用されていた。小規模校で若手教員が多く、超過勤務が課題であると聞く。学校運営協議会委員が、理科の授業における実験の準備や後片付け、天文講演、総合的な学習のゲストティーチャーを積極的に務めるなどとして、今後も、地域で学校支援のあり方を検討していく。	本校は若手教員の割合が高く、学習指導と生徒指導の両輪の研修を充実させて、人材育成を図る必要がある。特に、授業改善のためのOJTは、若手教員同士の授業公開を日常的に進めていきたい。また、理科実験の授業支援のように、地域の方に支援を要請し、校務の効率化と授業の質の向上に努めたい。
5①	懇談会や通信、学校HP等で情報発信し、保護者や地域の理解と協力を得られるよう努めている。安全・安心な学校をめざし、防災教育、安全教育を進めている。保護者や地域人材を活用した教育活動に取り組んでいる。	A	特色ある学校づくりの3本柱(グローバル・ネイチャー・カルチャー)の教育活動は、コロナ禍で制限していたが、直面する状況を見極めながらゲストティーチャーなどを一部再開した。地域の方に講師をお願いしている防災教室についても、3学期に開催予定である。授業参観や行事が保護者や地域の方に公開できないため、学校ホームページの更新を頻繁に行い、情報発信に努めた。	A	コロナ禍で授業参観や行事が制限される中で、学校ホームページを頻繁に更新し、情報発信していることは保護者や地域にとってうれしいことである。また、まち協月報「やまひ」にも、校長欄が設けられ、学校の様子が保護者以外の地域の方にもよくわかるようになった。防災教室など地域人材を活用する取り組みについては、コロナ禍であっても出来る限り協力したい。	今後もコミュニティスクールとして地域や保護者と協働しながら、特色ある取り組みを継続する。今年度はコロナ禍でプレスリリースは控えているものの、学校通信・学年通信や学校ホームページで情報発信していきたい。山中比叡平学区の活性化のためにも、各種メディアを通じた情報発信には力を入れていく。
5②	保幼小中間の子どもたちの交流や合同行事、出前授業、教職員間の授業公開・合同研修等、保幼小中連携の推進に努めている。	B	昨年度はコロナ禍のため、それまで継続してきたやまのこ園児との交流会(3・4年生「ニコニコ会」、5年生「スマイル会」)は中止となった。しかし、今年度はコロナも一定の落ち着きを見せてきたことから感染対策を講じて、行うことができた。小中連携についても、皇子山中学校区内の6年生と中学生が集うOSK会議も同様に行うことができた。これらの活動は保幼小中の連携を推進していく上ではよい活動だった。	B	比叡平小とやまのこひろばは同じ敷地にあり、コロナ禍以前、保幼小連携は他校と比べ活発に行われてきた。更に連携を強化するはずが、昨年度コロナ禍でほとんどの行事が中止となった。しかし、今年度は感染対策をしっかりと上での連携が図れたことは、良かったと考える。来年度も感染防止策を万全にしなが、交流の仕方をさらに工夫しながら保幼小連携が継続できることを期待したい。	来年度はコロナ禍でも仕方をさらに工夫して保幼小連携を再開したい。新学習指導要領の授業時数増に伴い、やまのこひろばとの交流の時間数の確保が難しくなっているため、同敷地内にある利点を生かし、休み時間等で日常的に園児と交流する機会を増やすようにしていく。また、更に連携を強化するために、小学校の学校運営協議会と、やまのこひろばの協力者会議を連携することも検討していきたい。
6①	いじめや問題行動の日常的な予防と早期発見・早期対応するための生徒指導体制や教育相談体制を確立し、いのち・人権の尊重、6つの約束の徹底などに取り組んでいる。	A	いじめ疑い事案を認知した際は、迅速に対応し、保護者と連携をとりながら丁寧に対応することを心掛けた。また、市教委とも早急に連絡をとり、指導を受けながら、その解決を目指した。週1ペースのいじめ対策委員会だけでなく、気になることがあれば全教職員で共有する等、小規模校の強みを生かし、情報交換を十分に行っている。	B	教員がいじめ疑いの認知が遅れると保護者は不信感を抱く。学校にいじめはあることを前提に、教員は子どもたちの言動に敏感で対応してほしい。今後も、全教職員で情報共有し、早期発見・早期対応をお願いしたい。地域でも、いじめ疑いを認知した場合は、情報提供を行ってほしい。	いじめの認知には、スピード感をもって対応していくよう努める。今後もいじめ対策委員会は週1ペースで続け、生活アンケートは学期に1回ペースで継続していく。小規模校では、いじめ事案が起こった際、子ども同士が適度な距離感を保つのが困難となる。児童と教員、教員同士の情報の共有を密にすることで、小規模校の弱みを解消していく。
6②	組織体制の確立、関係機関と連携した相談体制の充実等、子どもの教育的ニーズに応じた特別支援教育に取り組んでいる。	B	校内支援委員会を概ね週1ペースで行い、全教員で支援を要する児童の情報を共有している。さらに特別支援室に研修講師の派遣を要請したり、教育相談センターに巡回訪問や発達検査も依頼したりして、関係機関とも連携してきた。	B	若手教員が多いので、今後も関係機関と連携しながら、組織的な対応をお願いしたい。また、やまのこひろばとの連携も強めたり、支援の必要な児童を早期発見・早期対応に努めたりするなどして、子どもの教育的ニーズに応じてほしい。	今後も校内支援委員会を概ね週1ペースで行うことを支援体制のベースとし、関係機関とも連携しながら、小規模校の強みを生かした手厚い支援を心掛けていきたい。保護者との相談、個別の指導計画作成と活用、やまのこひろばとの連携等を組織的に進め、支援の必要な児童の早期発見・早期対応に尽力する。